

---

# 白雪姫へ

園絵屋その衛門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白雪姫へ

### 【著者名】

ZZマーク

N15331F

### 【園絵屋その衛門】

### 【あらすじ】

グリム童話「白雪姫」を、白雪姫を殺そうとしたお妃の視点で語る。自分より美しい娘の白雪姫に嫉妬して、殺害しようとお妃は次々と計画する。しかし、その計画は失敗し、幸せな結婚をした白雪姫の前で、焼けた上靴を履かされることになるお妃。死を前にしたお妃は、白雪姫に向けた最後の言葉を唱えた。心の中で。

## (前書き)

「白雪姫」の意地悪王妃は、継母であるといつのが通説ですが、初版では、なんと実母でした。子殺しが現実にある現代ですが、当時の時代背景と母と娘の問題を考慮しました。

私の前に、怪しい赤みと熱気を放つ、焼けた鉄の上靴が置かれた。拒むことはできない。

これがお前の復讐か。と、私は私の敵にまなざしを向けた。彼女は私の視線に気づいておびえたような表情になる。傍らの夫に何かさやかれ、敵は私から田をそらした。そう、お前の考えなどではない。お前はただ周囲に従うだけの女だもの。

私は心中でせせら笑う。私の唯一の敵で、私の千倍も美しい、白雪姫を。

白雪姫は、自分というものを持たない娘だった。

何もかも人のいいなりで、自分の身の回りの世話をするはずの小間使いに、逆に使いまわされるほど、自尊心もない娘だった。

この、人の顔色をうかがい、人の意に沿おうとする性格は、肉親の愛情に恵まれなかつたせいかも知れない。そうは言つても、私が母の愛を注ぐことはありえないことだったのだ。私の体から出たとたん、子どもは別室に連れて行かれ、乳母の手に渡された。私が会うこととはめつたなく、会うことがあつても形式ばつたもので、私が姫を抱くことはなかつた。保母と家庭教師に育てられた白雪姫は、会うたびに、私の知らない子どもになつていつた。

国王との間に、ほかに子供は恵まれなかつた。寵愛がなくなつたわけではない。国王はどこからか避妊の知識を得て、私に子供を産ませまいとしたのだ。

私は飾り物のお妃だった。

あのときの望み通りに子供が生まれるのなら、どうして『男の』子供を望まなかつたのか、と私は後悔していた。

白雪姫を身籠っていたころ、ある冬の日、私は縫物をしていて針

で指を刺し、血が雪の上に落ちたのを見た。そのとき「この雪のよ  
うに白く、この血のよに赤く、そしてこの黒檀（窓枠の）よに  
黒い子供がほしい」と思った。白雪姫は、その望み通りの白い肌、  
赤いくちびる、黒い髪と瞳を持っていた。それは見事な色彩のコン  
トラストであり、しかも私ゆずりの整った顔立ちの上にそれらが配  
置されていた。

しかし、まだ子供だし、あの頭の悪そうなうすら笑い（ほほ笑み  
とは呼びたくない）を浮かべた小娘が、《美女》になれるかどうか、  
と私はたかをくくっていたのだ。しかし、それは私自身の望みであ  
り、現実ではないことを、あの口、私は思い知らされることになる。

私は一枚の不思議な鏡を持っていた。

鏡は私のありのままの姿を映し出すだけでなく、私の問いに正直  
に答えるのだった。

「鏡よ、壁の鏡よ、國じゅうで一番美しい女は誰？」

いつもなら、鏡はこう答えた。

「お妃さま、あなたがこの国で一番美しい」

しかし、その日の鏡は違つた。

「お妃さま、あなたがここでは一番美しい、けれど白雪姫はあなた  
の千倍は美しい」

鏡の言つことは正しい。知のない若さにあふれた美しさのほうが、  
より愛でられるのだ。

白雪姫は、まだ公式の場に立つ年齢ではないが、そつなる口がじ  
きに来る。國民の目に白雪姫はさらされ、そしてその美しさはだれ  
もが認めるようになるだろう。世継のために婿がさがされ、盛大な  
結婚式が執り行われ、そして、誰もが白雪姫に注目するだろう。

男子を産まないお妃の立場は弱い。王母ではないから、敬われる  
ことがなくなる。今は王妃といつこと、美しいということで人々は  
私に注目し、尊敬されもするが、もし玉座の脇に、王の後継である、

若くて美しい白雪姫が立つことになつたら。

若さで輝く白雪姫を見て、王が私の美の衰えに気づいたら。

私は人々が私でなく白雪姫を見、私など目もくれなくなることを思い、王の寵愛を失うことを思い、それには耐えられない、と感じた。

私はひとりの狩人を呼び、白雪姫の暗殺を命じた。

証拠に姫の肺と肝臓を持つてくるように言つと、ほどなく狩人はそれらを持って戻ってきた。

料理番に『森の美容の薬である』と告げて、それらを料理させた。出来上がりの分量がだいぶ少くなつたように思えたが、私はどがめだてはしなかつた。そして、王女を食らうという罪を、私以外のだれが犯したのか、と考えながら、愉快な気分でそれらを食した。罪は罪だが、若くて生きのいい臓物は私に何かを与えたらしい、私はその後、美しさをほめる言葉をいつもより多くかけられた。姫の行方不明を私に結びつけて考える者はいなかつた。そういう疑いを打ち消すほど、姫の母親であるという私の立場、また私の美しさが、まだ保たれていたからだろう。

そして私はまた鏡の前に立つた。

「鏡よ、壁の鏡よ、國じゅうで一番美しい女は誰?」

「お妃さま、あなたがここでは一番美しい、

けれど七つの山のむこうにいる白雪姫は、あなたの千倍も美しい

人は嘘をつく。しかし鏡は嘘をつかない。

狩人も、所詮は男。あのあどけなさの残る美貌にほだされたとうわけだ。

もう、他人は頼るまい。私は自分の手で白雪姫を殺害することを決心した。

私は三回、白雪姫を殺そうとした。まずはもの売りのばあさんに化け、一回目は胸紐、二回目は毒の櫛で、三回目は百姓女にばけて

毒リン「」で。三回ともやりそこなったわけだが、同じような手口であつたにもかかわらず、一回はともかくあの一回も殺されかけた白雪姫は、学習能力がないと思つ。

もともと人のいいなりでしか行動できない娘であつたが、小人にきつく言いつけられていたにもかかわらず、通りすがりの知らない人間の言葉にさえ従つて戸や窓を開けてしまつということは、何が大事かを判断する能力もないことになる。

一国のお妃としてやつていけるのか、と思うが、飾り物のおきさきとしてなら勤まるだらう。と思つた。その美しさが咲き誇つているつむぎは。

皮肉なことだ。私は白雪姫が、私より輝かしい地位に立つことに嫉妬して殺そうとしたのに、それが、飾り物のお妃という、私の後継としてしまつたのだ。

私は将来容色が衰え、私を誰も見てくれなくなることを恐れた。しかし、私にはその将来がなくなつた。

私の将来の不幸を継ぐのは白雪姫だ。

その美が衰えて、誰にも目をかけてもらえなくなつて、泣くがいい。私はもう、恐れなくてよい。

私は心安らかに、平然とドレスの裾をあげ、真っ赤に焼けた鉄の上靴に片足を差し入れた。

了

(後書き)

参考文献

ベスト・セレクション初版グリム童話集

吉原高志・吉原素子／訳

白水社

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1531f/>

---

白雪姫へ

2011年1月29日03時02分発行